エッチュウバイの資源管理に関する研究

（資源評価調査）

岡本　満・内田　浩

１．目的

エッチュウバイ資源の持続的利用を図るため、ばいかご漁業の漁業実態を調査し、適正漁獲量、漁獲努力量等の提示ならびに漁業情報の提供を行う。これにより、本資源の維持・増大とばいかご漁業の経営安定化を図る。なお、ばいかご漁業全体の調査結果については、後述する 2022（令和 4）年の漁況に記載した。

２．方法

(1) 漁業実態調査

島根県漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者が記入した操業野帳を解析し、本種の漁獲動向、資源状態、価格動向および漁場利用について検討を行った。

(2) 資源生態調査

漁業協同組合ＪＦしまね久手出張所および同仁摩出張所に水揚げされたエッチュウバイについて、各銘柄の殻高を測定し、銘柄別漁獲量から殻高組成を推定した。

３．結果

(1) 漁業実態調査

2022（令和 4）年のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量は 74.4 トン（前年比 83%）、水揚げ金額は 4,840 万円（前年比 131%）であった。また、平年（過去 10 年）との比較では、漁獲量は 112%、水揚げ金額は 146%といずれも増加した。

平均価格は 650 円/kg（平年比 158%）であり、平成 10 年以来 24 年ぶりに 600 円/kg を超えた。銘柄は特大、大、中大、中、小及び豆の 6 銘柄であり、特に小型銘柄は比較的高単価で取引される。小の平均単価は 768 円/kg、豆の平均単価は 810 円/kg であり、銘柄別単価が最も低い中大でも 600 円/kg を超えた。平均単価が平年を大きく上回った理由については、新型コロナウイルス感染症にかかる諸規制の緩和がもたらした需要の回復によるものとの指摘があった。

利用した漁場は、江津沖から島根半島沖の水深 190～210 m の範囲に集中しており、操業日数が多い漁期年ほど北東から南西に広がる傾向にあるものの、近年はほぼ同様の範囲で操業している。

(2) 資源生態調査

資源状態の指標となる 1 航海当たりの漁獲量（CPUE）は 1,079kg（平年比 140%）であった。1989（平成元）年以降では最高の CPUE であった 2021（令和 3）年（1,198 kg）に次ぐ CPUE を記録した。

1 航海当たりの漁獲個数は 20 千個（平年比 125%）であった（図 1）。近年は 1 航海当たりの漁獲量および同漁獲個数ともに増加傾向であり、資源は高水準にあると考えられる。

漁獲物の殻高は 36～118 mm の範囲であった。2016（平成 28）年以降 40～80 mm が平年に比べて増加傾向を示していた。しかし、2019 年からは逆に低下傾向となり 2022（令和 4）年も同様の傾向がみられた。小型群の減少は将来の資源低下に繋がるため、今後の資源動向については注意が必要である。

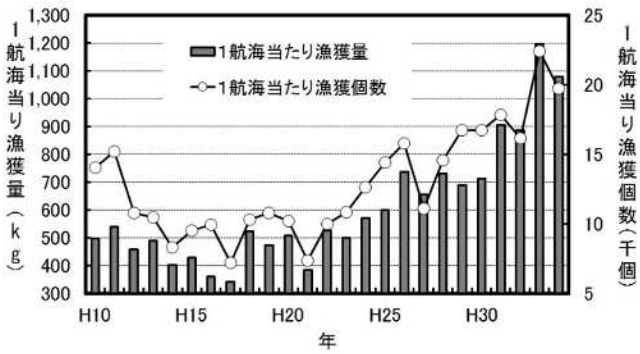

図 1　1 航海当たりの漁獲量および漁獲個数

４．成果

調査で得られた結果は、島根県小型底曳網協議会ばいかご漁業者部会で報告した。調査結果は島根県石見海域におけるばいかご漁業の資源管理計画に基づく自主的管理措置である上限漁獲量の設定等の検討資料として用いられ、同海域のエッチュウバイ資源の持続的利用の推進に役立てられた。